

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名： 團 康晃

本研究は、地方公立中学校におけるフィールドワークをもとに、「休み時間」における子ども達の相互行為のあり方、そしてそこでのメディア利用と、その中で達成されるメンバーシップのあり方（成員性）を明らかにしている。

本論は 0 章の導入章と三部から構成されている。0 章では、休み時間が授業とは異なり、活動やそこで使用できるメディアや期待される成員性が授業に対して相対的に自由であることを、小説の分析から確している。0 章で確認した休み時間の特徴は、学校が他者と出会い、これまでとは異なる何者かになりうる場であることを考える上で重要なものであることが示されている。

第一部は、「休み時間」の経験にアプローチするための先行研究レビューである。つまり学校の中を「グループ」として捉えるという社会学的な思考を解体し、その場その場で織りなされる人びとの活動と、その活動を可能にする道具・メディアとそこで達成されるメンバーシップに目を向けていくための、先行研究の課題を明らかにする作業が遂行されている。

1 章では教育学・教育社会学と文化社会学における先行研究が整理されている。教育学・教育社会学において学校の中の人びとの経験の重要性は繰り返し指摘されてきた。しかし、実際にアプローチされてきたかといえば、十全になされてきたことはなかった。さらに 90 年代以降になると学校という空間は、若者文化が流れ込む場として捉えられるようになり、具体的な人びとの経験へのアプローチはなされてこなかったと著者は分析する。

2 章では、休み時間における人びとの経験にアプローチするための方法論のレビューを行っている。前半ではグループエスノグラフィーの先行研究である Willis と MacLeod の分析の手続きを検討し、その課題を明らかにしたうえで、調査者によるグループの指定ではなく、フィールドの人々のカテゴリーの運用に目を向けるという本論のアプローチの有効性を確認している。特に、様々な人が同じ空間で過ごしながらかそこで焦点の定まった相互行為を行い、そこで何らかのアイデンティティを達成しているということを十全に記述するため、Goffman およびエスノメソドロジー研究の立場から、人びとの集まりと成員性をめぐる活動の記述の方針が確認されている。

第二部では、先行研究を踏まえ、本論のフィールドについての様々な背景情報が確認される。まず、3 章では、フィールドの背景と調査過程および分析の章において登場する人びとについての概要が示される。続く 4 章では、学校における教師たちの生徒の活動の把握方法と、休み時間をめぐるいくつかのルールが確認される。子ども達の休み時間の経験にアプローチする前に、その休み時間に対する大人のまなざしがいかなるものか、確認する必要があると著者は主張する。それは子どもの休み時間にとっての重要な環境だからだ。中学校の教師にとって休み時間は自らの休み時間であるのと同時に、次の授業の準備や移動のための

時間でもあり、いつも生徒の活動を見れるというわけではなかった。教師は授業やホームルームで対峙していない時は、子ども達をみることができない。そうした限られた機会の中で、生徒を理解している。それゆえ教師たちは子ども達の状態を把握する方法を持ち、またトラブルを未然に防ぐためのルールを設けていた。こうした事象が経験的なデータ分析をもとに社会的に描写される。

5章からは個別の休み時間の活動の分析がなされている。5章では、学校において「生徒」であることとそれ以外の何者かであることの違いについて、成員カテゴリー化装置の特徴からアプローチしている。事例としては、生徒会選挙前後の朝のあいさつ運動の時間に生じた男子の集まりに焦点があてられる。彼らは最終的に、教師の「生徒指導」の対象となるが、彼らは「生徒会」という生徒カテゴリーの一部となるメンバーではなく、そうではない者たちとして集まりを組織しようとしていた。その方法を見ることで、学校の中でつねに公的にレリヴァントである「生徒」であることと、そのなかで誰かの仲間や友だちであったり、学校側の準備していないアイデンティティを獲得する仕方が明らかにされる。

第三部では、二つの事例が扱われる。それらは共に2000年代において文化研究において注目されてきたものだ。一つはケータイ小説とその読者。彼女らは時に「ヤンキー的」な存在として扱われてきた。もう一つには、8章で見ていく物語作者たち。彼、彼女らは物語制作の中で、「おたく」や「腐女子」と結びついた活動を組織していた。

本論文は、それぞれの事例を調査者が「グループ」として「ヤンキーグループ」や「おたくグループ」として記述するのではなく、彼、彼女らの活動と、そこでの道具、メディアの利用の中で、どのようにしてメンバーシップを達成しているのか明らかにしている。つまり90年代以降、文化社会学やメディア批評において注目されてきた二つのアイデンティティのあり方が、学校の休み時間の中で様々なメディア利用をしながら、多様なメンバーシップを切り替えたり、その情報を管理する中で経験されていることが示される。

6-7章では書籍として持ち込まれるケータイ小説、8章では物語の執筆の舞台となる大学ノートに焦点があてられる。これらのメディアは学校の中の時間に、学校の外の知識を持ちこむ、人びとが他者とであう、学校の準備しない何者かになるための、重要なメディアになっていると著者は分析する。

6章では、学校の中に書籍のケータイ小説が持ち込まれるという事態の経緯が確認される。ケータイ小説についての研究の多くは、携帯電話という新しいメディアに注目するあまり、メディアミックスという事態に注目することはあまりなかった。しかし、現状においてはこうしたメディアミックスの状況は進み、流行として社会的に注目されることはなくなった今も、ケータイ小説やソーシャルメディア発の紙の書籍は学校で読まれていた。こうした環境が成立していく過程が記述される。

7章では、第六章で確認したケータイ小説読書環境での人びとの活動に焦点があてられる。図書館に配架されることの少ないケータイ小説をより多く読めるよう、女子生徒は他の女子生徒の持っていないケータイ小説の書籍を購入し、貸し借りをして読んでいた。貸し借

りの場面は、ケータイ小説の感想が語られる場であり、同時にテレビドラマ化されたケータイ小説についての語りであったり、さらには現実の恋愛についての語りになされる機会となっていた。それはいわば、「女子」であることがなされる場となっている、そう著者は分析する

一方、モノとしての書籍のケータイ小説が教室に持ち込まれている時、男子もまたそのモノにアクセスすることができる。男子は、ケータイ小説を、女子を「エロい」とからかう資源として用いつつ、それは男子のケータイ小説に対する態度の表出であり、男子の「エロさ」を示すものであった。一方、男子の中には女子のような態度で、ケータイ小説を読む者もあり、そうした男子は女子の中でも一目を置かれていた。それは、ケータイ小説が「男子」「女子」と異なる形で結びつくが故の有徴化であると著者は分析する。

8章では、学校の休み時間における物語制作の事例が分析される。これは一見、先行研究が「おたく」として論じてきたような事例にみえるかもしれない。実際、その活動の中では「おたく」カテゴリーがレリヴァントになっていた。しかし、そこではアイデンティティをめぐる情報管理の中で、「おたく」に限らない様々なアイデンティティカテゴリーが用いられていた。しかも、それは大学ノートをも舞台とする物語制作の一連の時間の中でなされていたのである。そのように著者は主張する

調査者は調査の過程の中で、特定のメンバーが大学ノートを用い、交換しながら書き綴られる創作小説を中心とした実践にであっている。2009年、当該フィールドでは「おたく」であることは、時に悪口となっていた。休み時間において、ある者は「おたく」をステイグマ化されたカテゴリーとして執行することがあった。こうした中、「おたく」でありうる者たちは、情報管理の下に活動を組織していた。大学ノートを用いた交換小説もそうした実践のひとつだ。ノートの紙上で小説は書かれ、読まれる。そして、その欄外に感想が述べられる。紙上のコミュニケーションが可能になる。一方で、ノートというモノは手渡さなければならぬ。それゆえに、参加者たちはしばしば廊下を集って、ノートを渡し、そこで趣味に関するおしゃべりをしてきた。貸し借り自体が、おしゃべりをする機会を作っていた。つまり、学校と言う場の持つ時間の中に、物語制作という時間が、大学ノートというメディアによって差し込まれていたのである。

5-8章で示す記述は、当然ながら休み時間のすべてを明らかにするものではない。しかしながらこれは、私たちが見落としてきた、しかしながら極めて重要な、文化的、メディア論的な人々の方法を明らかにするものであり、これからの文化研究のひとつのいき方を示すものとなりうるものといえる。そうした着眼点について審査委員一同肯定的な見解を持ったものの、全体の構成を俯瞰する構造、事例の細分化による論旨の抽象性、教育（社会）学との距離の置き方についての問題、事例分析でのデータの扱い方についての他解釈可能性の存在など（カテゴリーの論理水準等）について質疑がなされた。しかし、これらの問題点、疑問点について著者はある程度合理的な形で解答を提示しており、今後の課題も十分に理解していると審査委員一同で判断し、合議のうえ、博士（社会情報学）合格と結論づけた。